原書まえがき

「現代医療」は根本から狂っている

nanigaanatawobyouki_jo.indb 1 2023/11/28 16:58

▼病気の本質を誤認する「現代医療」

人間の身体（からだ）の自然な状態とは良い健康である。

しかし、一生を通じて良い健康を維持することは、むしろ難しいと思われる。

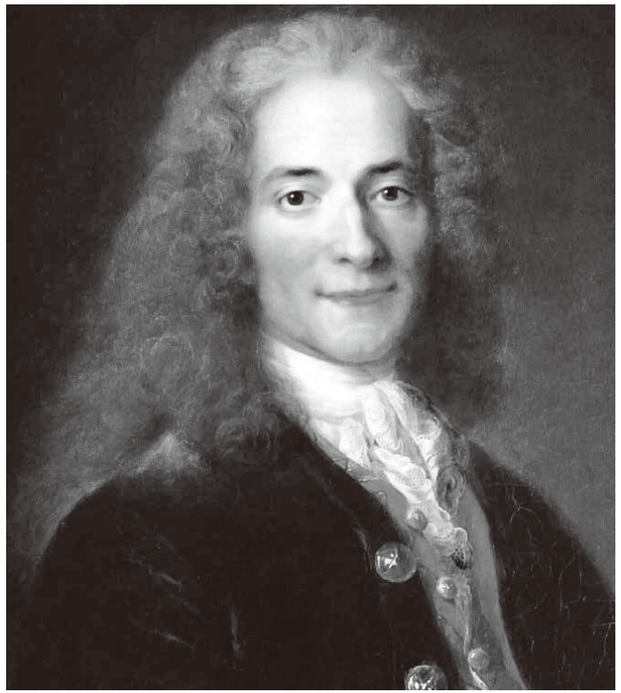
病気は人間の共通経験のようだが、これはあらゆる形態として表れ、深刻度も異なるようだ。例えばよくある風邪などは、自然治癒し、短期間だが、関節リウマチなど多くの慢性的状態は不治とされる。そういった病気がおおよそ逃れられない、もしくは不可避であることが人生の一側面と見なされるかもしれない。しかし、本書が示すように、これは誤った思い込みである。

とは言っても、多くの人がその人生において、何らかの形の病気を経験する事実が、根本的な疑問をもたらす。中でもとりわけ、なぜ起こるかだ。言い換えれば、本当は何があなたを病気にするのだろう？

このような疑問に対する一般的回答としては、二つの相互に関連する考えであり、その二つともが、基本的真実として広く信じられている。第一は、その人が何らかの病気の種類にかかったというものである。第二は、それぞれの病気には、固有の実体があり、特有の症状で識別しうるというものだ。本書では、この考えが真実ではないことも示そう。

事実上、すべての「ヘルスケア」システムで採用されている病気に対する従来のアプローチとしては、患者の症状を和らげたり、終わらせるとされるレメディまたは「薬」を用いるものである。このアプローチの元になる考えとしては、症状の停止が病気の克服を示し、その成功の結果は完全に「薬」で達成されるというものだ。しかし、同様のアプローチではあるが、異なる医療制度では、人間の病気の治療に異なる種類の「薬」が使用される。「薬」には、天然物質や天然物質から派生した製品の形をとるものと、合成化合物から製造された製品の形のものがある。

人間の病気治療のための「薬」という言葉の使用を、François-Marie Arouet（１６９４－１７７８）、つまりヴォルテールが要約している。彼の言葉が、このイントロダクションを飾った。しかし、こんな18世紀の考えは、21世紀では無関係と、ほとんどの人が思うに違いない。薬、病気、人間の身体についての医師たちの知識が、ほんのわずかか、あるいは全くないなどとは。こういった視点が基づくのは、おおよそ次の考えだろう。過去3世紀の間に「医療科学」が飛躍的進歩を遂げ、21世紀の医師たちは、極めて完璧（かんぺき）ではなくとも、薬、病気、そして人間の身体に対し



「医師とは、その知識があまりない薬を、それ以上にわからない病気を治すために、何一つわからない人間というものに処方する者である」

ヴォルテール

nanigaanatawobyouki_jo.indb 2-3　2023/11/28 16:58

て徹底的な知識があるというものだ。そうではないことを本書では示す。

「医療科学」分野での前進が、「現代医療」として知られる医療制度に組み込まれてきた。これは、唯一の証拠に基づく（evidence-based）医療であり、固い科学的基盤があるとされる。「現代医療」はヘルスケアとして最も進んだ科学的形態との考えが、その推進の正当化に使われてきた、世界中の政府がオフィシャルに採用する唯一のシステムとしてである。

「現代医療」こそが本物のヘルスケアを提供する唯一のシステムとの主張があるがため、本書ではこの点にフォーカスする。しかし、後の議論で示すことだが、この主張には根拠がない。さらに見ていくことは、医学界が流布する病気情報は、実質上ほぼすべて誤りであることだ。その理由は、基盤となる考えや理論の根本的な欠陥にある。これらの考えや理論の欠陥性により、ヴォルテールの言葉が、「現代医療」として知られる21世紀の医療システムにも適用できる。これは、薬、病気、人間の身体についての貧弱なレベルの知識に基づき運営され続けるシステムである。

本書では、「医学界（medical establishment）」という言葉を、現代医学のシステムを実践、研究、指導、促進などの形で支えるすべての人々、組織、産業、学術・研究機関を指す言葉として使う。

言うまでもなく、問題の解決には、その根本原因の完全な理解と正しい識別がされねばならない。これらの原因が排除されたときにのみ、問題が終了するからだ。極めて当然だが、これは病気の問題にも適用される。しかし、多くの人々において、病気は継続するのみならず、悪化するのである。「現代医療」によって、治療と予防が施されたにもかかわらずだ。

ここから導かれる論理的で正しい結論としては、「現代医療」は問題の本質の把握に失敗し、すべての根本原因の正しい識別にも失敗していることだ。この失敗の結果としては、病気問題の解決として完全に不適切な手段を医学界が導入していることである。通常は製薬企業の製品を含むこれらの手段によって、病気を治療し、予防するとは主張するものの、その原因排除はしないゆえ、問題解決はできない。しかし、より心配なことに、これらの製品は常に問題を悪化させるのである。

「病気」に関する「現代医療」の失敗は、その実践が依拠する理論の欠陥的本質に完全に起因している。

この宣言は疑いなく、大部分の方には、大きな物議を醸すものと見なされるだろう。しかし、これはその真実性を損ないはしない。本書を読む場合には、心に留めてほしい、

以下のドイツ哲学者アルトゥール・ショーペンハウアー（1788–1860）の言である。

「すべての真実は三つの段階を経る。最初は馬鹿にされ、次に激しく反対され、最後には自明と受け入れられる」

「現代医療」の考えと理論の本質的欠陥を明らかにするとともに、本書の議論では、病気の真の性質と原因を説明し、読者には情報を与えよう。情報を得たうえでの決断を行い、自らの健康に益となる適切な行動を取るためのものだ。

▼各章の概要について

医師たちは、医学部でこう教わる、患者の症状で病気を特定し、その治療薬を処方せよと。第1章では、製薬企業の薬が患者の健康を回復せず、益よりも害になる理由を明らかにする。

ワクチンについて広く信じられていることは、「感染因子（infectious agent）」によって起こる病気を防ぐための、最も安全であり、最も効果的な方法である。第2章では、ワクチンがいかに効果がなく、危険であり、かつ何の科学にも立脚しないことを暴露する。

ある病気については、感染性であり、「病原性微生物」により起こるとの考えがあるが、これは「細菌論」に基づいている。第3章では、この理論が決定的に証明済みではないことを示す。そしてまた、「細菌」と呼ばれる微生物について流布される、ほぼすべての情報が完全に誤りであることを示す。

第3章での「細菌論」への反論から疑問を抱くだろう。つまり、「感染性」とされる病気の原因の本質である。第4章では、多くの「伝染性」とされる主な病気について、医学界の説明に内在する問題を明らかにする。そしてまた、これらの発生について、より信頼できる、いくつかの説明を提供することにしよう。

多くの病気が人間と動物の間で伝染するとされる。第5章では、多くの動物の病気を検証し、これらの主張の欠陥を示し、より信頼できる説明を提供する。この章ではまた、生体解剖の基本的問題も説明する。病気研究目的の生きた動物実験で行われるものだ。

「有害物質とその影響」による環境汚染は、医学界も含む科学コミュニティが認めるより、はるかに人間の健康にとって深刻な脅威である。第6章では、主な毒物の原因である実際の化学物質と電気を見ていく。これらが環境を汚染しているのだが、その毒の主な利用例を示す。また、この章では、日常使用される様々な製品の成分として有害化学

nanigaanatawobyouki_jo.indb 4-5　2023/11/28 16:58

物質が使われる点についても触れる。例えば、家庭用品、コスメチック、パーソナルケア、食品、ドリンク、そして、あまり知られていない利用例である（訳注：以上の第6章までは上巻に収録）。

「医学界」は、ほとんどの慢性的健康問題について、その「正確な」原因は不明と認めている、より広く呼ばれる名称としては、非伝染性疾患である。第7章（下巻）では、多くの非伝染性の病気について論じ、これらの「知識の欠落」の存在と程度を明らかにする。それに加え、いくつかの既知の原因要素を検証し、実質的にすべてに共通する根本的メカニズムがあることを説明する。

健康問題は単独で考えることはできず、必ず他の状況と関連しており、そのほとんどが世界中のかなりの割合の人々に影響を与えている、特に「発展途上」と言われる国々においてだ。国際組織、特に国連配下のものは主張する、人類の直面するこれらの問題すべてが21世紀に解決できると。しかし、この主張には根拠がない。第8章（下巻）で検証することは、これらの問題を解決するという直近の試みである。特に、直接的、間接的に人間の健康に影響を与える問題に重点を置き、これらの対策が解決策として不適切であると明らかにする。これらの対策は、問題の真の原因に対処できず、その排除ができないからだ。

薬やワクチンの開発に想像を絶する巨額の資金が投入されるのに、「現代医学」が「病気」問題に不適切な解決策を採用する理由は、「既得権益」の影響が大きい。医学界の運営する医療制度を含む人間生活の主要領域に及ぶ、これら既得権益者の存在と影響力は、第9章（下巻）で議論する。

以上の章で、医学界の提示する説明の問題点を明らかにしていく。最終章では、「病気」の本当の姿を説明する。また、ほとんどの場合に病気が複数の原因の結果であることを述べ、その共通メカニズムを明らかにする。この第10章（下巻）では、問題点の説明に加え、人々がこれらの原因要素への曝露（ばくろ）を減らし、自身の健康に責任を持ち、コントロールする方法についても説明する。

それぞれの「病気」については「医学界による定義」を使うが、これは2007年版『オックスフォード・コンサイス・メディカル辞典（Oxford Concise Medical Dictionary）』による。そうでない場合は注釈を入れる。

すべての引用された記事あるいはウェブページは、最後のリファレンスセクションにまとめる（訳注：文献一覧とリファレンスは下巻に収録）。ウェブページやウェブサイトが削除されていない限りである。

インターネットの動的な本質から、ウェブページやファクトシートは度々更新される。本書で使われる情報は、執筆時にのみ正確なものである。

文献目録中にリストされた出版物からのすべての引用は、公正利用と見なされる。

nanigaanatawobyouki_jo.indb 6-7　2023/11/28 16:58

［上巻 目次］

原書まえがき――「現代医療」は根本から狂っている 1
▼病気の本質を誤認する「現代医療」 3
▼各章の概要について 5
翻訳にあたって（字幕大王） 19

第1章 病気への処方箋：健康のために死ぬ

▼真実からはほど遠い医薬品の現状 25
▼「処置」はあっても「回復」なき医学 25
▼科学者の役割とは 26
▼人間全体を処置する「ホリスティック」 27
▼「現代医療の父」ヒポクラテス 28
▼毒か否かは服用量による？ 29
▼医療ドグマの始まり 30
▼薬は不要、有害 32
現代医学 33
▼人体は化学的に修正できる!? 35
▼根拠のある医学論文は1％！ 36
▼薬の製造過程でも毒性が 38
医原性疾患 40
▼米国医療は善より害が多い 42
精神薬 44
▼抗うつ剤の「効果」は「副作用」！ 47
降圧剤 49
▼何度も変わる「正常」の範囲 50
▼ナトリウムが主要因か？ 52
▼アーシングが高血圧に有効!? 54
スタチン剤 54
▼酸化したコレステロールが危ない 56
▼スタチンの長期的なリスク 57
市販薬（OTC） 58
▽アスピリン 60
▽パラセタモール／アセトアミノフェン 61
▽コデイン 62
▽制酸剤 62
▽要約――有益効果さえ幻視！ 63

第2章 ワクチン接種：効果がなく危険

▼「自然免疫」も欠陥理論！ 67
▼WHOいわく「完全なワクチンなどない」 68
▼WHOとユニセフの主張に乖離（かい）あり 69
▼ワクチン接種はグロテスクな迷信 70
歴史 72
▼ジェンナー以来、ワクチン接種にエビデンスなし 74
天然痘 77
▼WHOですら矛盾する説明 78
▼不衛生な環境で天然痘が発生 79
ポリオ 80
▼水銀など有害金属の曝露によるもの 81
▼ウイルス由来でなく有毒な農薬が原因 82
▼予防どころかポリオを起こすワクチン 83
▼ポリオは減ったが麻痺が増えた!? 84
子宮頸がん 85
▼がんはウイルスとは無関係！ 87
▼性的接触で感染という嘘 89
ワクチンの成分 90
▼水銀は微量なら安全？ 90
▼神経毒ホルムアルデヒド 91
▼脳に影響するアルミニウム 92
▼血液が中毒を起こす 93
ワクチン被害 94
▼医師を騙（だま）す教育プログラム 95
▼ワクチンに発がん性成分あり 96
▼新たな病名でごまかしている 98
▼子供の脳への悪影響 99
▼「集団免疫」説の嘘 99
▼免責でやりたい放題のワクチンメーカー 100
未来 102

第3章　細菌論：致命的誤り

▼「細菌」は病因にならない　107
▼証拠なきパスツール仮説　108
▼バクテリアが発見されるも……　109
▼パスツールの黒歴史　111
▼ワクチンを正当化する「細菌論」　112
科学実験　114
▼実験室の特殊環境が与える影響　116
ウイルス　118
▼「運動性がない」のに「移動する」？　120
▼未証明の「ウイルス感染」　121
▼ウイルスは空気中を伝播しない　122
▼実験室での研究の誤り　124
▼「潜伏感染」という言葉の嘘　125
▼ウイルスの存在を証明した者なし　126
▼ウイルス病因論は証明されていない　127
バクテリア　128
▼コッホ原則の欠陥　129
▼「潜伏感染」と「細菌論」は矛盾する　130
▼欠陥だらけの実験手法　131
▼ほとんどの微生物は病原体ではない　133
▼バクテリアは腐生性　134
▼バクテリアが病原体というドグマ　135
▼バクテリアとの共生関係　136
▼バクテリアの多形性　138
▼多形性は医学界に都合が悪い　140
▼バクテリアは有益なもの　141
抗生物質、耐性菌、スーパーバグ　142
▼「誤用」でなく「使用」が問題だ　144
▼イタチごっこの抗生物質乱用　146
▼抗生物質より大切な衛生習慣　147
他の「細菌」　147
▽菌類　148
▼カンジダの誤解　149
▽原虫　150
▼マラリアは劣悪な衛生によるもの　151
▽蠕虫（ぜんちゅう）　153
免疫と抗体　154
▼「抗体」という概念も見直せ！　155
▼「病気に対する免疫」理論もおかしい　156

第4章　「感染症」：神話を一掃する

▼「感染症」は存在しない！　161
▼「感染症」神話は製薬会社のため！　162
天然痘　164
▼不潔な文明人VS衛生的な先住民!?　166
▼鉱山採掘で有害金属を吸い込む　167
▼先住民殺しの真相を隠す「細菌論」　169
小児疾患　169
▼小児疾患は病気でなく排毒のプロセス！　171
ハンセン病　172
▼不衛生な生活環境こそが病因　174
梅毒　176
▼梅毒検査に問題あり　177
▼性行為への罰という迷信　179
1918年インフルエンザ　180
▼銃でなく注射で死ぬ兵士たち　181
▼アスピリンだけが原因か？　183
▼病名変更の手口に迷わされるな！　185
▼ワクチンの神経毒性　187
▼塩素の軍事利用がスタート　187
▼戦場での劣悪な衛生環境　189
▼「流行病」は誤解釈だ　190
黒死病　191
▼年輪が示す環境の激変　192
▼彗星（すいせい）と地震による大気汚染　194
結核　196
▼「結核菌」はどこにあるのか？　198
▼薬剤による負のスパイラル　199
▼接種地域のほうが多く発生！　201
▼「代理排泄」という解毒プロセス　202

HIV／エイズ 203
▼葬られた毒物仮説 203
▼エイズのウイルス仮説、証拠も論文もなし！ 205
▼HIVでエイズは発症しない 206
▼正統派エイズ理論の修正 208
▼抗体検査に問題あり 209
▼治療薬で殺される!? 210
▼エイズ業界は真実を拒む 212

第5章　動物と病気：さらなる医療神話

▼動物の病気が人間に移る!? 217
▼動物用ワクチンは人間に対して安全？ 218
▼抗生物質過剰使用の害 220
▼「細菌論」こそ根絶すべし！ 222
狂犬病 223
▼パスツールの野蛮な偽医療 224
▼「狂犬病」とは虐待か栄養不足のこと 226
▼狂犬病のウイルスを特定できず 227
牛結核 228
▼間引きに効果なし 230
▼ワクチン反応は「免疫」で検査反応は「感染」？ 230
▼「細菌論」が正しいならば…… 232
BSE（牛海綿状脳症） 233
▼肉骨粉でなくリン系化学物質の毒 234
▼口蹄疫ウイルスも感染せず 236
粘液腫症 236
▼ウサギ大量死の怪 237
▼長期間にわたる殺虫剤・農薬 240
▼ウイルス原因説が真相を隠す 242
炭疽病 243
▼パスツールの大失態 245
▼「羊毛選別者病」の発生源は？ 246
▼ヒ素中毒の羊毛選別業者 247
生体解剖（動物） 248
▼生体解剖を支えるヘリクツ 249
▼動物実験と臨床では大違い 251
▼相乗的に反応する水銀の毒 252
▼実験室は自然環境とは別物 253
▼チンパンジーさえ人間の生理と異なる 254
▼製薬業界が知られたくないこと 256

第6章　地球を毒する：歪んだ科学

▼「気候変動」だけが問題か？ 261
▼毒性は量によるという前提 263
▼「悪役」二酸化炭素は陽動作戦 265
▼汚染物質曝露をなるべく避けよう 267
自然界の毒 269
▽鉛 270
▼工業分野での鉛の使用 272
▼鉛中毒による麻痺 273
▽水銀 274
▼二酸化炭素よりはるかに危険なのに 274
▼熊本の水俣病 275
▼低濃度でも神経毒となる水銀 276
▽ヒ素 278
▼19世紀英国のヒ素中毒 278
▼「化学療法」時代の幕開け 280
▽ウラン 281
▼ウラン鉱山労働者の高死亡率 282
人工毒物およびその用途 283
▼安価で大量生産できる化学製品へ 284
▼「黒い黄金」石油の発見 285
▼テクノロジーの進歩でますます…… 286
▽化学物質 287
▼化学物質の相乗効果は見ないフリ 288
▼塩素という「パンドラの毒」 289
▼「リスク評価」はザルだらけ 291
▼残留性あるDDTによる被害 292
▼安全な量の毒物なんてあるのか 293
▼有機リン系の農薬も神経毒 295
▼細菌よりひどい有害化学物質 296
▼レアアース生産で進む環境破壊 298

▼軍と化学産業の闇、MKウルトラ 299
▼LSDで人体実験 300
▽電離放射線の影響 302
▼放射性物質の危険性 303
▼核実験による深刻な大気汚染 306
▼核実験場の近くでがん発生率増加 307
▼安全な被曝量などない 309
▼「細菌論」の誤用で食品に照射 311
▼補助金で成り立つ高コストの原子力発電 312
▼二酸化炭素よりも電離放射線のほうが危ない！ 314
▽非電離放射線の影響 315
▼激変した地球の電磁場 316
▼新技術の登場で電気汚染が進む 317
▼携帯電話の登場でさらなる電気汚染 318
▼科学的証拠を認めぬWHO 320
▼ハイパーサーミアでがん細胞は死滅する？ 322
▼5Gは兵器に使用されている！ 324
▽水圧破砕法（フラッキング） 326
▼掘削して地中に強毒性の化学物質 327
▼水圧破砕で飲料水資源を汚す 330
▼大気も汚染するフラッキング 332
▼フラッキングで地震が起きる!? 333
▽気候工学 334
▼反射率の高いアルミニウム 336
▼アルミニウム空中散布で気象改変！ 337
▼ケムトレイルの有害物質 339
▼気象改変に関する内部告発 340
▼電離層を加熱する兵器HAARP 341
毒入り食品 344
▼「混ぜ物」でなく「毒入り食品」 347
▼欠陥理論で食品規制 348
▽加工食品 350
▼食品でなく化学実験か 351
▼コーデックス規格にも不備あり 353
▼食品ラベルは誰のため？ 355
▽食品添加物 357
▼化学物質の組み合わせは試験されず 359
▼主犯格の化学物質を「細菌」のせいに 361
▼偽装される化学物質 363
▽食品着色料 364
▼食品色素が子供に悪影響 365
▼多動性の障害は着色料からか 367
▽食品香料 369
▼香料産業のビッグビジネス 369
▼天然由来でも抽出溶剤の危険性あり 372
▽グルタミン酸ナトリウム（MSG） 374
▼うま味調味料で神経細胞が「興奮」 375
▼「植物性」とはいえ…… 376
▽食品保存料 377
▼胃の中で発がん性物質に変化 380
▽塩 382
▼自然塩なら有用なのか 383
▽砂糖 384
▼砂糖で結核になる!? 387
▽人工甘味料 388
▽サッカリン 388
▽アスパルテーム 389
▽遺伝子組み換え食品 391
▼食料を制する者は、人々を制する 392
▼「緑の革命」は火薬の在庫処分から 393
▼業界とFDAの責任逃れ 394
▼GM作物の嘘八百 395
▼農薬依存のためのGM技術 397
▼GM食品でラットの臓器障害 399
▼遺伝子工学の基礎からおかしい 400
▼除草剤で身体はボロボロに 402
▼種子特許化こそが真の狙い 403
毒に汚染された水 405
▼微生物より化学物質に注視せよ 407
▽水の塩素化 408
▽水のフッ素添加 410
▼有毒な廃棄物としてのフッ素 411

▼虫歯予防という神話　413
▽その他の水の毒　415
▼化学物質による水質汚染　417
▼「細菌」よりも怖いもの　418
▼飲料水の薬物残留　419
▼多重曝露は分析する術なし！　421
毒まみれの身体　422
▼経皮曝露で毒が全身に　423
▽家庭用品　426
▼多用されるフタル酸エステルの害　426
▼食品用ラップも安全ではない　428
▼掃除用具も危険がいっぱい　429
▼「香り」にごまかされるな　432
▽化粧品、パーソナルケア製品　433
▼パラベンや香料も安全でない　435
▼抗菌作用成分が益よりも害！　436
▼製品表示だけではわからない　438
▽衣料品　440
▼合成繊維は便利だけれど……　440
▼火災リスクより危ない難燃剤加工　442
▼中国の繊維産業による汚染　443
▼抗菌加工が細胞に毒　444
▼肌に密着、殺人衣服！　446
▽歯の問題　448
▼銀歯で水銀に曝露する　448
▼アマルガムを段階的に廃止　450
▼詰め物で生体電気が狂う　451
▼虫歯は「甘い毒」から　452
まとめ　453
▼科学的知識の巨大な欠陥　454
訳者あとがき――現代医学のほとんどすべてが間違い　457
▼証拠なき「医療科学」　458
▼ＨＩＶ／エイズ騒ぎも同じ手口　459
▼人道に対する罪　460
▼強固な医学界の洗脳　462
訳者自己紹介　字幕大王　465
推薦――読者の世界認識を変える良書（中村篤史）　469

［下巻　目次案内］

第7章　「非感染性」疾患：さらなる医学的誤解
第8章　世界的問題：より広い視点から
第9章　既得権益と支配のアジェンダ
第10章　病気の正体とその原因
終章　自然に健康になる方法
リファレンス　000
文献一覧　000
著者について　000

カバーデザイン　櫻井浩（⑥Design）
校正　広瀬泉
本文仮名書体　文麗仮名（キャップス）

nanigaanatawobyouki_jo.indb 16-17　2023/11/28 16:58

翻訳にあたって（字幕大王）

本書タイトルとカバーデザインについて

本書は、ドーン・レスターとデビッド・パーカーによる「What Really Makes You Ill?: Why Everything You Thought You Knew About Disease is Wrong」の全訳である。原著者から、このタイトルをそのまま使うこと、原著と同じ「考える人」の写真を使うこととの要望があり、日本語としてはいかにも直訳調だが、タイトルを「本当は何があなたを病気にするのか？：あなたが病気について知っていると思ってきたことすべてが間違いの理由」とした。

本書追加部分について

原著者了承のうえ、本邦訳書で独自に追加した部分がある。一つは、本書で言及される人物の写真をパブリックドメインのものから選択し、その言葉とともに扉裏写真として追加した。原著は文字ばかりのため、何かしらのアクセントが欲しいとの編集側の要望に沿った。

もう一つは、▼で示す小見出しである（これに対し、罫線で囲った中見出しと▽の小見出しは原著にあるもの）。原著の本文が時には、何の見出しもなく別の話題に移ってしまうため、読みやすさを考慮して編集側が追加した。これについても、原著者にはこころよく了承していただいた。

論文・記事・書籍のタイトルについて

本書は学術書などの研究者向けではなく、一般向け書籍であり、当然だが、本書を手にする読者が英語になじみのないことを想定する。そして、本書で取り上げられる多数の論文・記事・書籍・ウェブページのほとんどが未邦訳である。さらに、原書では、例えば、論文タイトルのみを示し「タイトルの示す通りだ」とし、それ以上の説明のない箇所も多々ある。したがって、本書中で多数引用される資料は、たとえそれが学術論文であろうが、そのタイトルの邦訳が必須（ひっす）になる。

そのため、これらの資料すべてついて、訳者による仮邦訳タイトルを示す。ただし当然だが、既に出版済み邦訳書のある場合は、出版者とともにその邦訳タイトルを示す。それ以外はあくまでも訳者による「仮題」である。そして、元の英語タイトルを同時に記載したとしても、ほとんどの対象読者には無用の長物であるため、基本的にこれらは本

WHAT REALLY MAKES YOU ILL?
Why Everything You Thought You Knew About Disease Is Wrong

Copyright © 2019 by Dawn Lester & David Parker
Japanese translation rights arranged with Dawn Lester and David Parker
through Japan UNI Agency, Inc.

Copyright © 2019 ドーン・レスター＆デビッド・パーカー

無断転載を禁ずる。この出版物のいかなる部分も、著者への事前の書面による許可なしに、複写、記録、その他の電子的または機械的な方法を含むいかなる形式または手段によっても、複製、配布、または送信することはできない。ただし、批評の中での簡単な引用や、著作権法で認められるその他の非商業的な使用の場合はこの限りでない。

免責条項：21世紀初めの医療は、ほぼ完全に「既得権益」に支配されており、その主張としては、彼らのシステム、つまり「現代医療」のみが本物の医療形態であり、他すべての形態は疑似科学か偽医療と見なされる。この支配の結果として、本書の著者である我々は、以下を声明すべき法的義務を負う。つまり、我々は医師ではないことだ。加えて、これも宣言せねばならない、その中身はプロフェッショナル、信頼できるソースから得たものだが、本書は情報的ガイドにすぎない。その核となる目的としては、人々自身の医療について本当に情報を得たうえでの決断をしてもらうことだ。

本書をすべての真実追求者に送る。

「誤りは何度伝えられても真実になることはなく、誰も見ないからと言って真実が誤りになることはない」
マハトマ・ガンジー

「権威に対する盲目的信頼は真実の最大の敵である」
アルバート・アインシュタイン

nanigaanatawobyouki_jo.indb 18-19　2023/11/28 16:58

文には示さない。ただし、巻末に未邦訳の原文のままのリファレンスおよび文献一覧（本邦訳書では下巻に収録）があるので、原典に当たりたい場合の利便性を考え、その番号を邦訳タイトルとともに示すことにする。

原著では、これらのリファレンスと文献一覧には、通し番号等は付されていなかった。本邦訳書で示す通し番号は、訳者が独自に追加したものである。

なお、巻末のリファレンスおよび文献一覧に含まれない資料については、適宜英語タイトルを示すようにする。これらが文献一覧に含まれないのは、単純に原著者のミスと思われるが、後述する理由で修正はしていない。

英語原文表記について

本書は「主流派」の「現代医学」から大きく離れた内容であることもあいまり、日本人にはなじみのない人名や、定訳のない概念などもある。読者の読みやすさを考慮し、これらについても、仮の人名カタカナ表記や、定訳ではない訳者による仮の日本語訳を示す。

ただし、ネット検索などで元の英語スペルが容易に得られない場合には、各章ごとに適宜、（ ）付きで英語スペルを示す。本書は一般的な日本人を対象読者とするものの、キーとなる名称の英語スペルがわからないようでは、読者によるそれ以上の深い調査ができなくなってしまう。昨今は、かなり精度の高い翻訳サービスが現れたこともあり、これらの名称をキーとして一般読者による研究ができるように配慮した結果である。

組織名に関して、特に一部の国際組織等は、その日本語名称が定訳としてあるため、これを使う。この場合もネット検索で当該組織の元の英語スペルを調べることは容易だろう。それ以外の日本語ではなじみのない組織については、可能な限り英語名称を付記するか、あるいは日本語名称にする必要のないと判断した組織については、英語名称のままとした。

動的なウェブページについて

原著にも断り書きがあるが、本書から参照されるウェブページの類は、原著出版時にのみ存在するものであり、インターネットの動的な性質から、本邦訳書出版時には、そのページが既に存在しないことがある。訳者の確認したところでは、実際にそのようなものがある。ページが存在していた場合でも、内容が更新されている場合もある。

このような場合に、読者が原典にあたりたい場合には、

ページタイトルを検索するか、あるいは、インターネットのあらゆる過去の情報を保存しているサイト、例えば、Wayback Machine（http://web.archive.org/）を使用されたい。このサイトでは、定期的にあらゆるページの最新状態を保存しているため、原著出版時の対象ページの状態をも確認できる可能性がある。

原著者の要望があり、これらの文献リストは、通し番号および邦訳書籍名称以外は、原著のまま何の変更も加えていない。

論文・記事の表記について

原著では、記事・論文・ファクトシート・報告書・ウェブページなど様々な形態の資料に言及している。原著では、記事と論文を「article」という言葉で一律に参照しているが、日本語では、記事なのか論文なのか区別をつける必要があるため、可能な限りこれらの「article」の実際の内容から、その区別をつけるようにした。

「治療」という言葉について

原著の目的は「現代医学」の誤りの指摘であり、「現代医学」は病気を「治せない」との立場から、治療（cure）という言葉より、処置（treatment）という言葉が多用される。しかし、医療にこの言葉を使うことは理解の妨げになると考え、原著の意図を曲げない限り、「treatment」の訳について、「現代医療」の使う「治療」を使用する。もちろん、治療と処置の区別が必要な箇所は、適宜そのように翻訳する。

その他の事柄

日本語では、「がん」と「癌」、あるいは「ガン」が使い分けられることがある。しかし、英語ではすべて「cancer」であり、「がん」に統一表記することにした。

bacteriaは、一般に細菌あるいはバクテリアと訳されるが、それらは同一のものである。また、原著でのgermの意味としては、人間への健康悪影響を及ぼすbacteriaとvirus（ウイルス）の二つを含む意味だが、それに対応する適切な日本語はない。しかし、germ theoryは一般に細菌論と訳され、germも細菌と訳されるため、bacteriaはバクテリア、germは細菌と区別して訳すことにする。つまり、本書において、細菌はbacteriaとvirusを包含する概念である。これは「細菌」という言葉の本来の意味では

nanigaanatawobyouki_jo.indb 20-21　2023/11/28 16:58

ないが、しかし、「細菌論」の一般的概念とは一致する。

一般に、日本語では同一の言葉、同一の概念だが、英語では複数の言葉があり、日本語ではそれらを区別できないケースがある。この場合、基本的には同一訳語を使うが、区別が重要な場合には、通常は使われない言葉を当てるようにしている。例として、高血圧症（hypertension）と高い血圧（high blood pressure）があり、通常は共に高血圧と訳される。また、天然葉酸（folate）と合成葉酸（folic acid）があるが、これも通常は一律に葉酸と訳されてしまうものである。これらについても、可能な限り元の英単語を示すようにしている。

著者の字幕付き動画、正誤表など

訳者が手掛けた著者二人の字幕付きインタビュー動画などは、以下のＵＲＬで閲覧することができる。ここには、動画のみならず、文書の掲載もできるので、正誤表やその他の情報があれば、この場所に掲載することにする。

https://odysee.com/@wrmyi:d

nanigaanatawobyouki_jo.indb 22 2023/11/28 16:58

第1章

病気への処方箋：健康のために死ぬ

▼真実からはほど遠い医薬品の現状

「Medicine（メディシン）」という言葉には二つの意味がある。その医学界の定義としては、「病気の診断、処置、回避のための科学、あるいは実施」、そして「病気の処置あるいは回避の目的で使う薬あるいは製剤」である。

「薬」と呼ばれる様々な医薬品や製剤は、医療従事者が患者に提供する「医療」の中核をなす不可欠なものと考えられている。定義に「科学」を含むことから、医学の実践は、科学的に確立した証拠に基づき、完全に裏付けられた強固な基盤を持つとの印象を受ける。また、この定義は、医薬品や製剤の使用も同様に科学的根拠に基づき、「医薬品」はその目的に適切かつ効果的との印象を与える。

しかし、残念ながら、真実からはほど遠い。病気の治療や回避に「薬や製剤」を用いる、いかなる医療実践においても、「科学」的基盤はないし、患者の健康を取り戻せるものはない。

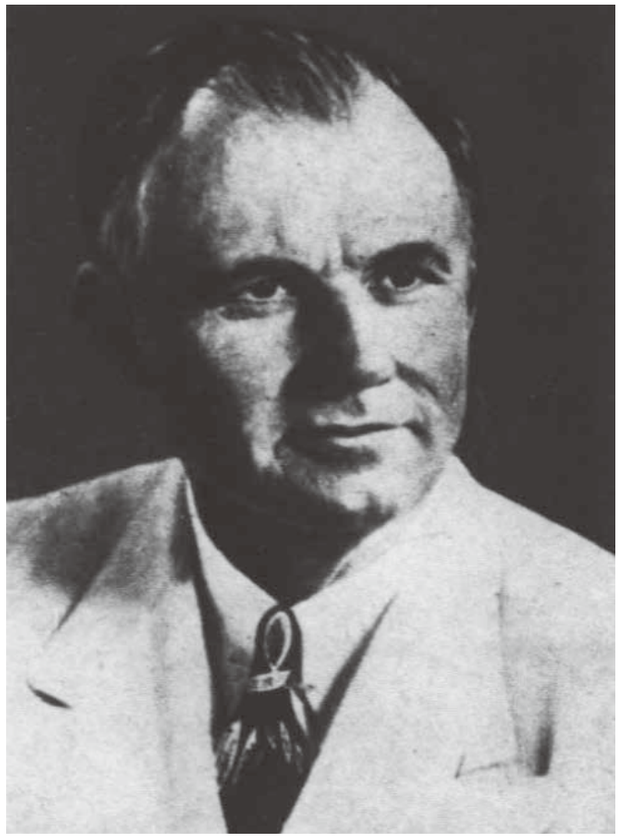
この宣言は、確実に多くの人がとんでもないと思うだろうが、真実であることを否定はできない。本章では、病気治療目的の薬の使用について説明する。病気予防のためのワクチン接種については、次の章で説明する。

数百の異なる病気があると医学界は主張し、それぞれ認識可能なユニークな一連の症状があり、適切な「医療」により治療可能だという。「医療」の目的は症状の停止である。その結果、治療により病気を成功裏に乗り越えたと解釈される。

少なくともこういった理論である。しかし、実際に現実世界では、同じ病気と診断され、同じ医療を受けても、各患者の経験としては広範囲の異なる結果であることが稀（まれ）ではない。このように大きく異なる結果になることは、理論に対する直接的な異議申し立てである。患者の中には、症状の完全な停止を経験する者もいる。しかし、この成功の結果は「医療」のおかげではありえないし、健康回復を意味してもいない。この理由は後の章で説明する。

▼「処置」はあっても「回復」なき医学

Medicine の定義の興味深い点としては、これが「処置（treatment（トリートメント））」を指すことであり、病気の「回復」ではないことだ。なぜなら、「医学界」は多くの病気について「不治」と宣言しているからである。こうした病気について彼らの言うことは、適切な処置で患者の状態を「管理」することだ。つまり、その症状は緩和されるだけで、除去



「薬漬けを惜しまない医師は、副作用の処置に忙殺され続ける」
ハーバート・シェルトン（Herbert Shelton）

nanigaanatawobyouki_jo.indb 24-25　2023/11/28 16:58

されるわけではない。

広く認められることとして、すべての医療は「副作用」を生じる。これは、事実上その治療から直接的に生ずる新たな症状である。この事実の重大性が十分には言われないため、ほとんどの人は理解不足である。しかし、新たな症状の発生とは、本質的には新たな健康問題の発生を意味するのだから、これは現行医療システムの中核的問題である。

病気の処置に使われる薬の効力には大きなばらつきがあり、薬により起こる症状の存在も明らかだ。これが重大な疑問を投げかける。「医療」システムの基本的目的と機能であるはずの、患者の健康状態を回復する能力に対する疑問である。

WHO（世界保健機関）のウェブサイトでは、健康の定義［R1・1］を次とする。

「健康とは、完全な物理的、精神的、そして社会的な幸福状態であり、単に病気や欠陥の不存在ではない」

この定義は、1948年のWHO設立時の憲章で初めて宣言されて以来変更されていない。WHOは、UN（国連）の機関であり、WHO憲章を批准（ひじゅん）するすべての国の全国民の健康に関する「権威」と指定されている。言い換えれば、WHOは実質的に全世界の健康政策を指示する。しかし、病気治療に関するWHOの推奨政策としては、ほぼ例外なく「薬」の使用が指定される。症状緩和のみで、病気治療効果がないと認められているものをだ。

WHOの政策は、WHOの目的「あらゆる場所で、すべての人のために、より良い健康を実現する」とは明らかに矛盾する。特に、WHO自身の「健康」の定義と照らし合わせれば明らかだ。

▼科学者の役割とは

科学とは過程である。この過程には、人間の知識レベルを拡張するために、世界の様々な側面の研究を含む。これら科学的調査の途中で観察された様々な現象を説明するための、仮説や理論の作成も必然となる。様々な研究や知識の中身が増えるにつれ、新たな情報が得られたり、既存の仮説や理論の特異点や矛盾が現れることがある。この場合、その研究分野が何だろうが、科学者に必要とされることは、これらの仮説や理論を新たな発見の日の下にさらし、再評価することである。この過程で、主流理論の改訂や改変を必要とするかもしれない。時には、新たな情報が、既存理論の放棄とともに、完全に新たなものへの置き換えを示唆するかもしれない。特に、新たな理論が、観測された現象について、より良くより説得力のある説明を提供する場合だ。

病気治療のための「医療」の基礎理論には、多くの異常や矛盾を示すことができ、明らかに徹底的再評価が必要である。しかし、より重要な点としては、人間の病気とその原因について、はるかに信頼性が高い、説得力のある他理論が存在することだ。また、その説明は、人々が自身の病気の原因に対処する手段を提供し、ほとんどの病気の状態から完全に回復し、本当の意味での健康な状態に戻す助けになりうる。

「医療」の歴史を説明するつもりはなく、その必要もない。あまりにも広大なテーマだからだ。しかし、「医療（medicine）」という言葉の使用の起源を明らかにし、21世紀初頭の状況に至るまでの経過を説明するには、この歴史の特定の側面に触れる必要がある。特に、WHOが全加盟国に推奨する医療制度による支配を考慮すれば、21世紀初頭の状況に至るまでの経過説明が必要になる。

病気の原因、その状態と患者の健康回復のための治療として何が適切か、歴史を通じて世界の様々な場所に多くの考えがあった。しかし全「医療」システムは同じ一つの原理に基づき行われる。病人には「治療」が必要で、患者の健康回復には「治療特性」を持つ特定の物質が必要というものだ。

▼人間全体を処置する「ホリスティック」

古代の風習や伝統の中には、病気の症状を示す人々の治療には、この世のものではない、邪悪で超自然的影響力を持つ存在への信念に基づくものがあり、常に、同じく超自然的性質を持つ「治療法」を使用した。これらの治療法には、悪霊払いの呪文（じゅもん）、特別なトークン（token）の使用などが含まれたかもしれない。その一方、他の古代の風習や伝統では、病気やその治療に、より現実的なアプローチがとられていた。それら治療法の多くでは、その土地で採れる植物などの天然物質に治療特性があるとされた。

医療目的での植物の使用は、世界の多くの地域で記録されており、数千年前にまでさかのぼる。例えば、アーユルヴェーダは古代インドの医療システムであり、5000年前にさかのぼると言われる。TCM（伝統的中国医療、漢方）もまた、数千年前と言われる。そのルーツはアーユルヴェーダにあるとされ、二つのうちアーユルヴェーダのほうが古い。これら多くの古代システムもまた、世界中の地域に影響を与えた。例えば、古代ギリシャの医療は、アーユルヴェーダと古代エジプトの医療に影響を受けたと言われる。後者のシステムはパピルスに記録され、文書化され

nanigaanatawobyouki_jo.indb 26-27　2023/11/28 16:58